

氏名・（国籍）	則 慧（中国）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博甲第24号
学位授与年月日	令和4年3月9日
学位授与の要件	学位規程第2条第2項該当
学 位 論 文 題 目	興道道邃の研究－その行跡と思想－
論文審査委員	主 査 教授 藤井 教公
	副 査 教授 落合 俊典
	副 査 教授 デレアヌ フロリン

## 論文内容の要旨

本論文は、興道道邃（以下道邃と略称）の事跡とその思想を中心に、彼の伝記の性格や生涯事跡と、その著作『止観記中異義』（以下『異義』と略称）の現存テキストの特徴及び思想内容などを解明しようとするものである。

道邃は、周知の如く湛然（711～782）の直弟子であり唐代天台第七祖とされており、また日本天台の開創者最澄（766～822）に伝法し、日中天台教学史上で重要な人物である。従来の研究では、道邃の事跡については、わずかに台州刺史陸淳（？～805）と交流し、最澄に伝法したという事柄に触れられるにとどまり、まだ十分とは言えない。また、著作については、道邃作とされている『天台法華玄義釈籤要決』『天台法華疏記義決』『摩訶止観論弘決纂義』という「三大部要決」の真偽問題について検討されてはいるものの、これまでに決着がついていない。そこで、筆者は、先行研究を踏まえながら、道邃に関する諸史料を精査分析した上で、彼の行歴や事跡などを再考察する。更に、彼の真作『異義』の本文と、そこに見られる道邃の教学思想を検討する。そして本論文は、次の五章から構成されている。

第一章 道邃の伝記とその行跡

第二章 『止観記中異義』の現存テキストの検討第三章 『止観記中異義』の校訂と訳註

第四章 道邃の天台教学思想

第五章 日本における『止観記中異義』の受容と影響

第一章「道邃の伝記とその行跡」では、798年に成立した「盧審則述記」（または「第七祖道邃和尚道德述」とも呼ばれる）、805年に乾淑が撰述した「道邃和上行業記」、最澄作とされている『天台法華宗伝法偈』所収「道邃和上行業記」の書写本、そして『宋高僧伝』『仏祖

統紀』などの文献に収められている道邃の諸伝記の概観を検討し、それぞれの性格や、成立の相互関係などについて考察した。それを基にして、彼が湛然に師事する経緯や、生没年、陸参との交際、長安で行われた『四分律』の校勘に参加したという事跡を解明した。これらは、従来の研究で全く触れられていなかった道邃の新たな行跡の一面であり、彼の人物像をより鮮明に把握することができた。

第二章『止観記中異義』の現存テキストの検討』では、『異義』の現存テキストの概観や相互関係などを考察分析した。現存テキストには、真如蔵本という写本と、龍大本、谷大本 A、正大本 A、正大本 B、蔵経書院本（刊本部分）という五種の刊本がある。そのうち真如蔵本は、叡山文庫真如蔵に所蔵され、1298 年に仙英によって書写され、ただ年代的に古いだけではなく、テキスト内容に関しても、刊本系統テキストより 11 条も多く収録し、全体として計 33 条の異説から構成されている。新たに確認された 11 条は、従来、全く知られていなかった内容である。この点で真如蔵本は、刊本系統の『異義』より優れたテキストであり、同写本に基づいて刊本の欠落箇所を補完し『異義』の新たな標準テキストを作成・校正する必要があると指摘した。また、五種の刊本は、いずれも同じ系統のテキストではあるが、成立の年代に違いがある。更に、『続蔵』巻 55 に著録されている『異義』流布本（「続蔵本」）は、蔵経書院本『異義』という「原稿」または「校正ゲラ」を経て生まれたテキストと言えよう。

第三章『止観記中異義』の校訂と訳註』では、真如蔵本を底本とし、刊本系統の代表格である龍大本を校本として翻刻・校訂し、『異義』の新たな標準テキストを作成した。更に、その新たな標準テキストに対して訓読・現代語訳を行なった。

第四章「道邃の天台教学思想」では、『摩訶止観』と『弘決』と『異義』の三書の対応部分を比較することによって道邃の天台教学思想の特徴を指摘した。

まず『摩訶止観』序文の中の「無漏総中三」に対する湛然・智雲・道邃の三師それぞれの「両教二乗説」、「三観説」、「三界説」という解釈を分析した上で、道邃の三界説は、『摩訶止観』「漸次止観」の説示を土台としており、より智顗の考えに近い解釈であるという点が明らかになった。

次に『摩訶止観』の「発大心」「四種三昧」「止観十境」「観不思議境」の説示に対する湛然と道邃、それぞれの異なる解釈を比較分析した。つまり「発大心」において湛然は「心」を前に、「道」を後に置くという次第段階の解釈を主張したのに対して、道邃は「心」・「道」とは前後ではなく、同時に生起するという相即不二の思想を強調している。「四種三昧」において湛然は『摩訶止観』の六根・六塵・五陰と十二因縁と三陀羅尼という三種の実踐行法を、それぞれ、声聞と縁覚と仏の三者に対応させたのに対して、道邃は、三種の実踐行法とそれに対応する声聞・縁覚・仏が、すべて修行者自らの心のあり方によって具わっているとして、「心」を第一とする心重視思想を唱えている。「止観十境」において湛然は十境中の二乗と菩薩の二境を円教の実道方便とした。これに対し、道邃は、円教の実道方便は、二乗・菩薩の二境のみに限らず、十境がいずれも包摂されていると示している。「観不思議境」において湛然は、善・悪・無記、方便、無漏、法性の五陰を、能観と所観との次第段階の視点によって、

それぞれ、外凡位、内凡位、阿羅漢、方便土に配当した。これに対し、道邃は、その次第関係を解消しており、修行者の存命中の肉身によって法性陰を得ることができるという即身成就の思想を主張している。この思想は、後世の最澄などの天台学者に多大な影響を与えていることが明らかになった。

最後に道邃は『弘決』において『摩訶止観』の「五種比喻」「四門」「超・不超」「次第断・超断」という教説が十分に解釈されていないことに対して、自身の見解を表している。つまり、彼は、「五種比喻」を「五停心観」に配当し、四句分別の論式によって「四門」と「超・不超」を解釈し、無漏智・世俗智によって「次第断・超断」を解釈している。これらは、『弘決』の内容と比較すると、『摩訶止観』の教説の原義とよく近似していることが明白となった。

第五章「日本における『止観記中異義』の受容と影響」では、証真（1124～1214?）の『止観私記』における『異義』からの14箇所引用を検討した上で、証真が『異義』の思想を依用し、『弘決』とは異なる自身の解釈を主張したことが明らかになった。

また、筆者は、靈空（1652～1739）の『摩訶止観輔行講録』における『異義』に関わる21箇所の引用を検出し、それらの引用の仕方から、彼が『異義』に対して批判的であったことを究明した。更に靈空の弟子である普寂（1707～1781）についても、彼が師の教学的特徴を受け継ぎ、『異義』の内容を引用し批判していることを明らかにした。このように、『異義』は、日本の天台学者に多大な影響を与えたことがわかる。

以上の五章を通じて本論文の目的である道邃の伝記・行跡・思想的特徴を解明し、従来の研究に新しい知見を付け加えることができた。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、中国天台宗第七祖とされる興道道邃を取り上げ、彼の伝記や数少ない現存著作の中の『止観記中異義』（以下、『異義』）を中心資料として用いて、その行跡と思想について明らかにしようとしたものである。

本論文は、序論、それに続く五章からなる本論、それと結論によって構成されている。著者はまず序論で、問題の所在とその背景、先行研究、本論文の構成について触れる。

第一章において、唐代に成立した道邃の伝記、宋代以降に成立した『宋高僧伝』などの伝に記される事績について比較検討し、それぞれの伝の特徴や、成立の相互関係などについて考察する。その結果、道邃が湛然に師事した経緯や、弟子の乾淑撰『道邃和上行業記』のテキストの一文を従来とは異なる読み方を採用することによって、道邃には陸淳の他に陸参（745/747～802）という官僚との交際があったことを確認する。また長安の安国寺で行われた『四分律』の校勘事業に道邃が参加していたという事跡も知られた。これらは、従来の研究ではほとんど触れられていなかったことで、著者が発掘した功績といえよう。著者は道邃の生年を唐玄宗開元二十三年（735）頃、没年を貞元二十二年（806）から元和六年（811）までの間と推定している。

また、章末において道邃の弟子と著作について触れ、著作の真偽問題の点から、これを真撰、真撰であるが散逸したもの、存疑の現存著作、の三種に分け、『異義』を真撰著作の一つとする。

第二章では、『異義』の現存テキストの概観やそれらの相互関係などを検討し、その結果、現存テキストには五種の刊本と一種の写本があり、このうち五種の刊本は、成立年代の相違はあるものの、いずれも同じ系統のテキストであることを確認したという。また、永仁六年（1298）、仙英によって書写された真如蔵本は叡山文庫に収蔵されていた。著者は叡山文庫に赴いてこの原本調査を行い、書誌情報を確認するとともにその内容を検討した。その結果、この写本テキストは刊本系統テキストより 11 条も多く道邃の「異説」を含み、全体として計 33 条の異説から構成されていることが判明したという。新たに確認された 11 条は、従来、全く知られてこなかった内容である。このようなことから、この真如蔵本写本は刊本系統の『異義』よりも優れたテキストであり、この写本に基づいて刊本の欠落箇所を補完し、『異義』の新たな標準テキストを作成・校正する必要があると指摘している。この写本は叡山文庫に収蔵されてはいたが、これまで顧みられることなく筐底に秘されていたもので、著者による再発見の功績は大きいと言える。

第三章では、真如蔵本を底本とし、刊本系統の代表格である龍大本を校本として、『異義』テキストの翻刻・校訂を行い、新たな標準テキストを作成している。更に、このテキストに対して訓読・現代語訳を試みている。著者のこの一連の仕事は中唐以降の天台教学研究にとって重要な素材を提供するものと評価できる。ただし、校訂作業のさらなる精確さと、訓読文の錬磨とが求められる。

第四章では、『異義』中の智顗『摩訶止観』、湛然『止観輔行伝弘決』それぞれの引用文と『異義』の道邃説の三者の対応部分を比較検討し、道邃の天台教学思想の特徴を浮かび上がらせており、道邃の思想が湛然よりもより一層智顗の原義に近いことを指摘している。また、道邃の教学思想中には疑撰とされている『天台法華玄義釈義要決』『天台法華疏記義決』『摩訶止観論弘決纂義』、いわゆる「三大部要決」の趣旨と似通った部分が見られることから、著者は「三大部要決」を道邃撰とする一つの根拠とすることができるとしており、今後の一層精密な検討が俟たれるところである。

第五章では、『異義』の日本仏教における思想的影響を検討する目的で、日本天台宗の宝地房証真（12-13 世紀）、降って 17 世紀の靈空、その弟子の普寂を取り上げ、それぞれの著作中に引かれた『異義』の引用文とその扱い方を検討して、それぞれにおける思想的影響を調査している。その結果によれば、証真は『止観私記』中に『異義』を 14 回引いており、証真が『異義』の思想を依用した上で、湛然の『止観輔行伝弘決』とは異なる解釈を主張したという。靈空は、その著『摩訶止観輔行講録』の中に 21 箇所亘って『異義』を引用したが、それらの引用の仕方から靈空は『異義』に対して批判的であったという。また靈空の弟子の普寂についても、彼が師の教学的特徴を受け継ぎ、『異義』を批判していることを明らかにした。このように、『異義』の思想的影響という点では、地域としては中国から日本にまで、時代としては中唐から日本の江戸時代にまで及んでいるとしている。

最後の結論部分においては、以上の五章の要点をまとめ、本論文が（１）唐末天台教学の展開とその影響について、一つの新視点を与えるものであること、（２）「三大部要決」の帰属問題について新たな視点を与えるものであるという、この２点を強調している。また、残された問題として、「三大部要決」のさらなる検討を行い、撰者の帰属問題について結論を得ることとしている。

以上、本論文の梗概を記すとともに、論文の功績と問題点を摘記してきた。本論文にはこれまでに見られなかった新知見が示され、またテキストクリティークによる校訂テキストの制作など、天台教学研究に資する功績が示されているといえる。ただし、日本語の誤記や表現の不適切な箇所、検討が不十分な点があるなどの瑕疵が見られるが、それらは本論文の功績を大きく損なうものではない。よって、以上の点から本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に十分値する成果であると評価するものである。